

第21回大会自由討議

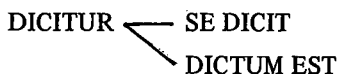
菅田茂昭

自由討議（要約）

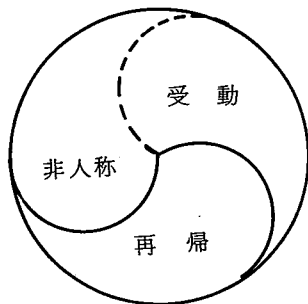
統一テーマ《ロマンス語に於ける未来表現》に関する3人の発表のあと、このテーマをめぐる自由討議に約30分間が当てられた。今回は国際的にもロマンス言語学のリーダーのひとりであるA.ロンカリア教授を迎えての大会でもあったため、ことに教授との質疑応答が中心となった。まず下宮氏がロマンス語の未来に対してアスペクト論導入の是非を問われたが、教授はアスペクトではなくモーダルとして捉えられるべきことを述べられた。さらに同氏からイタリアにおけるロマンス語学者名をとの質問に対しては、ローマ大学ロマンス語学科の設立にまでさかのぼって、E. Monaci, C. De Lollis, G. Bertoni, A. Monteverdiなどの名を挙げられ、同時にC. Tagliavini, A Varvaroなどにも触れられた。また、イベリア半島のみで方言分布が南北の帯状をなす諸理由も列挙されて、ロマンス諸語の発達の地方的特色を強調された。

Si dice 型の非人称構文について（レジュメ）

1. 歴史的にはたとえば *si dice* を *SE DICIT* にさかのぼるのみでは不十分である。第1に



のような図式で、統合から分析への移行をとらえ、受動の -R に代わる二つの形式のうち *DICTUM EST* が本来の受動構文として残るのに対し、*SE...* は動作主の削除を経て非人称化への道を歩んだと考えられる。第2に受動形の -R は、元来非人称的な働きをもったものといわれるが（例 *puqnatur* “a fight is going on”. cfr. L. R. Palmer 1977³）、中動態としての用法も受継いでいるため、-R は三つともえ図で示されるような働きを併せていたと考えられる。

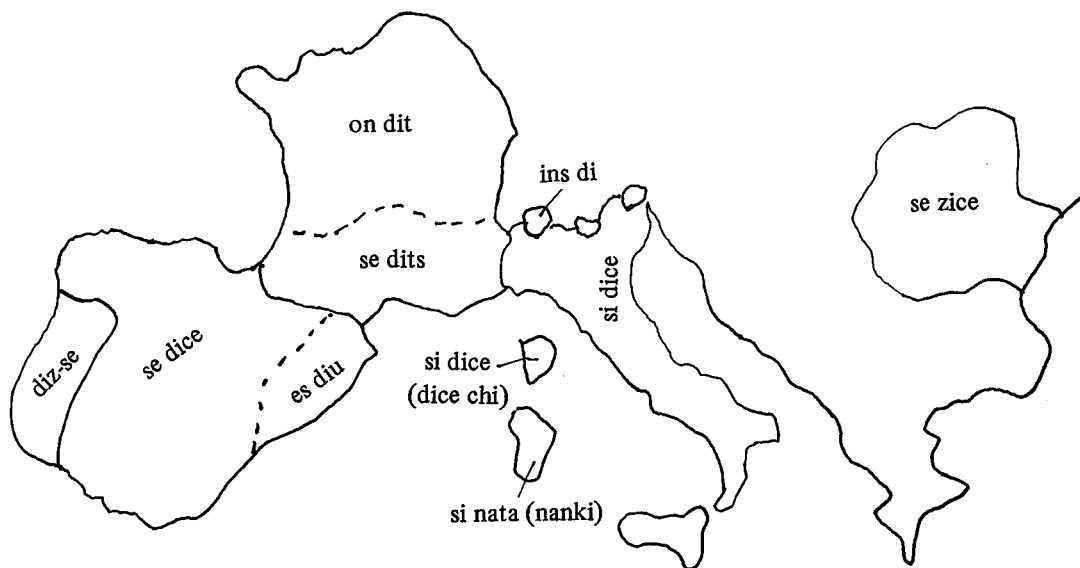


こんにちロマンス語において *si dice* 型の構文に関して再帰的用法はもちろん、ことに非人称的用法とさらに、受動的用法との間で動揺する根拠はこのようにこの構文の起源に由来するものである。現在イタリア語で受動の助動詞と再帰・完了の助動詞が共通に *essere* である現象が想起される。

なお、念のためこの3人称の再帰代名詞 *se* + 動詞が受動を示すためには、動詞が + transitive であることのほか、その文法的主語 = 論理的目的語が *Questo libro si legge molto* のように -human であるという条件が必要である。なぜなら **Questo scolaro si loda spesso* のように + human だと受動ではなく再帰の可能性をもつからである (cfr. P. Tekavčić 1972)。

受動構文から非人称構文への発展には、動作主を示す前置詞句 (たとえば *da...*) の消去が前提となろう。動詞が - transitive であるにもかかわらず *se* を加えた例は非人称構文の確立を裏付けてくれる。 *Itinerarium Aetheriae* にみられる *vadent se* のような例はその走りといえる。

3. この動作主が漠然とした「人」である、*si* + 3人称単数の動詞からなる構文はロマンス語圏の大部分にみられる。フランス語の *on dit* に当たるこの構文の分布を示す。



イタリア方言に関しては、未来形の分布の際のような差異は見当らないこと、および古くはイタリア語にも *come uom dice* (Boccaccio) のような表現が存在したことを指摘するに留めたい。

4. 現代語における問題点をイタリア語で例示すれば、(1) *la risaia fu inondata*, (2) *fu inondata la risaia*, (3) *si inondò la risaia* の間で、*la risaia* が(1)では既知情報として、(2)(3)では新情報として与えられていること、また動作主が *si* を用いた(3)のみ + human であるのに対して(1)、(2)、では -human であることが注目される。

次にここで非人称構文として取り挙げているこの構文をめぐるしばしば受動説と非人称説とが対立する。前者は *si* 自体がすでに受動の助動詞としての機能をもっと主張し、**si verrà detta la verità* あるいは **si è stata detta la verità* などが存在しえない (すなわち *si* とともに受動の助動詞が用いえない場合がある) こと、および *da parte nostra si è detta la verità* のように動作主が改めて指示される例を挙げる。これに対して後者は *si dice la verità* はく S + V + O > 構文の典型とみる方が自

然であり、その証拠として *la verità a loro la si dice* のように *la verità* が代名詞化されると対格に置かれることを挙げる (cfr. *Italian Linguistics*, vol. 1 1976 における V. Lo Cascio ほかの論文)。名詞 (± singular) に依存する *si mangia .. ~ si mangiano ...* は、いずれの視点からも解釈しうる例である (cfr. その条件をめぐる詳細な分析は、たとえば最近では *Journal of Linguistic Research* Vol. 2, No.4, 1982 における A. Belletti の論文など)。

結論として、*si dice* 型の、ここで非人称と呼ぶ (したがって能動的に解釈する) 構文は、実は能動と受動の中間に位置する、いわば両者の中和現象であると見做すことによって一応の解決をみたい。

第 22 回大会自由討議

菅 田 茂 昭

自由討議 (要約)

統一テーマ《ロマンス語における再帰代名詞 *se*》について 6 名に及ぶ発表 (報告) があり、そのあと約 30 分間活発に意見が交換された。タイトルには再帰代名詞 *se* と記されていたが、討議はその非人称的あるいは受動的用法に集中し、しかもその区別をめぐるマラス氏をはじめ多くの参加者からの発言が続出した。司会者 (菅田) はすでに発表したごとく非人称は能動と受動の中和と捉え、あえて区別しない立場をとることとなったが。また矢島氏からはこの非人称的用法の起源においては再帰的性格が根強く感じられる旨発言があったことも報告しておきたい。